

戦前の呑川

記 菱沼 公平

1. 呑川の変貌

大正時代から昭和初期にかけて、各地で耕地整理が行われた。呑川流域でも耕地整理が行われ、それに伴い呑川の一部で川の直線化が行われた。これにより直線部分の流速は早くなった。

大正13年(1923)の関東大震災後、以前よりまして呑川流域、現在の世田谷区、目黒区、大田区内への人口の流入が多くなった。このため木々は伐採され、田畑は埋められ住宅地、工場用地にと転換していった。このことは流域の湧水をなくし、一方では保水力の無くなった台地に雨が降るとその雨水が川に集中し水位を増大させ、洪水の大きな原因となった。そして川も自然の川(飲み水、灌漑用水に利用、魚とりなどが出来た)から家庭から出る汚水、雨水の排水路と化していった。(末尾図1~3参照「土地利用の変化」)

戦前の呑川について書かれたものは少ないが、大田区教育委員会発行の「呑川は流れ

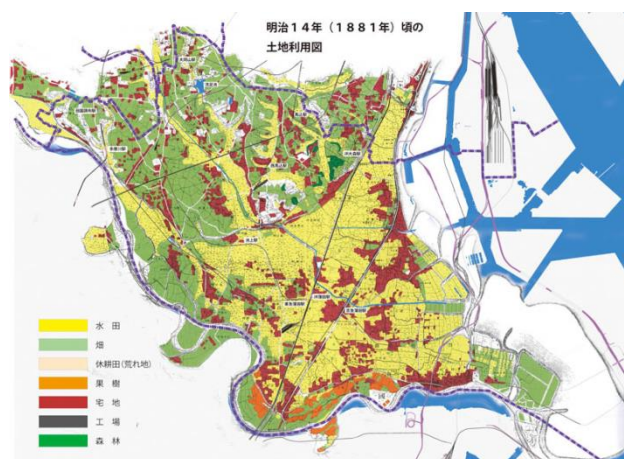
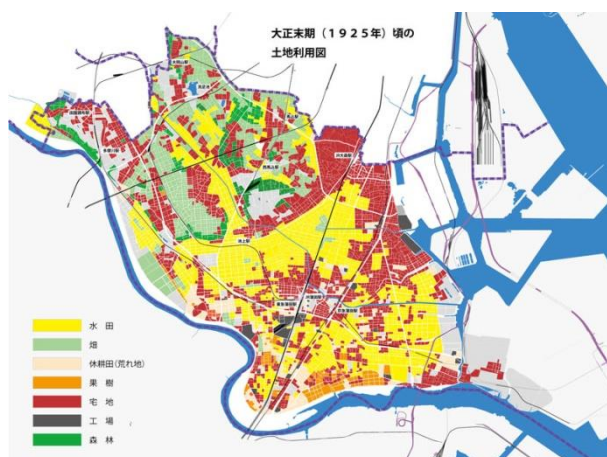
る」でおよそ次のような事が書かれていた。

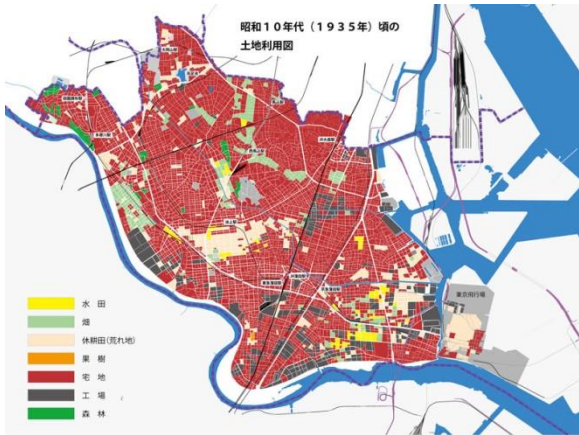
呑川の中流域にあたる石川橋(中原街道)から後の池上橋(国道1号線・第2京浜国道)辺りは、川幅約5m、水深約1.5m程度の小川だった。その所々で堰が設けられ、水田に用水を引いていた。しかし前期のような呑川では十分な水量を供給できず、一部に限られていた模様である。当然ながらも水争いも起きていたと考えられる。

昭和に入ると人口の流入も多くなり、各地で耕地整理が行われ、この地でも池上本町、池上、久原、道々橋、雪谷、石川の各町が統一し、池上西部耕地整理組合を結成し、耕地整理を行う中で呑川の蛇行を石川橋から池上橋までほぼ直線化した。

この工事完了後、両岸に幅3間(5.4m)道路が出来、そこへ地元民と青年団の奉仕により、桜樹二千本を両岸に植え、呑川の桜(長栄桜)として親しまれていたが、今は無い。

池上橋から堤方橋の間でも一部流路を変える工事が行われたと言われているが、地元の古老の記憶に残っている。





2. 水害被害の増大

大正11年(1922)11月に起こった洪水は、蒲田地域の浸水家屋は3,000戸にもなったと伝えられ、これは明治末期の洪水の数十倍に達する被害であり、住民の迷惑はその極に達したと言われている。

このような中、大正14年(1925)夏に組織された、荏原郡町村議員連盟「土曜会」は、その年の11月21日、第3回総会を開き「数個町村を貫流する河川の改修は、原則として東京府費支弁とすべし、就中呑川、立会川、蛇崩川、内川の如きは、急速に実施すべく、東京府会に提案されん事を望む」との決議をなし、東京府知事および府会議長に決議文を送付した。

3. 昭和の呑川

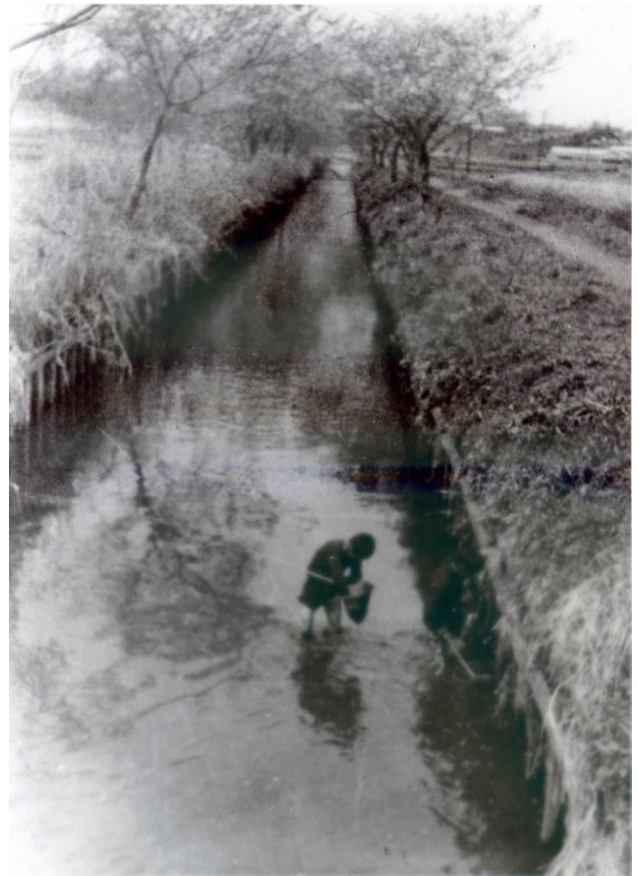
末尾図4の写真は、昭和初期の写真ではないかと言われており、場所は久が原と思われる。水路が直線化されており、板による護岸から耕地整理後のものと思われる。川幅もそれほど広くなく、子供の足を見ても深さはなく、水量も多くはない。このように子供が水辺で遊べる呑川になってくれればと思っている。

末尾図5の写真は、上の写真より上流側である。昭和7年に撮影されたものである(雪

谷小学校創立40周年記念誌より)。

どちらの写真も河岸の道は狭く、昔の田園風景をまだ残している。

太平洋戦争の空襲のせいも、特に下流部の古い写真が残っていないのがとても残念である。



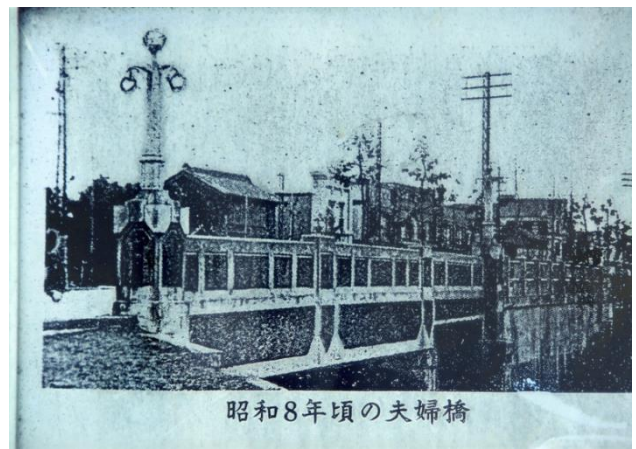
4. 中土手事件

川は灌漑用の水路から、生活排水の排水路へと変化をしていった。土地に保水力が無くなった雨水は一挙に川に流れ、たびたび洪水を起こした。特に池上町の下池上、徳持、堤方等は被害が大きく、時には床上浸水が100軒以上に及ぶこともあった。呑川には蒲田方面と大森方面に水路が分かれるところがあり、そのため中土手が設けてあった。上跡橋～双流橋下流あたりまで平均の幅が約2.7mの中土手である。これが流れを妨げ洪水の原因であるとして池上町と蒲田町の間で争いになった(中土手事件。これについては後の章で説明)。昭和6年(1931)この中土手は撤去された。

この中土手という構造物はよくわからない。写真は一度も見たことがない。蒲田・池上町史の記述によれば「長さ:220間(396m)、平均幅:1間半(2.7m)」とある。これほどの中土手を作るとか考えられない。建造物ならせいぜい10~15mの物を川の真ん中に作れば十分と思われる。とすれば自然に出来たものと思われる。戦前の写真で見える呑川では、これだけの中土手を形成するのに一体どれくらいの時間がかかるのだろうか。相当古い時代から存在したもののようと思われる。新編武蔵風土記稿の荏原郡、北蒲田村の中で「堰枠字若宮と云所にあり、横一丈一尺五寸、この所は村内の地なれども、大森堤方と三村組合の堰なり、この堰寛政十二年までは坎樋なりしを、御修造ありて堰枠となる、」とあるが、この所にあったと思われる中土手の記載はない。川の流れを分けている中土手の一方に堰を設けるとはとても理解に苦しむ。中土手とはよくわからない呑川のミステリーだと感じている。

5. 夫婦橋上流の堰撤去

夫婦橋上流の右岸側に六郷用水(松葉用水)の取水口がある。江戸時代にはこの取水口の下流側に堰を設け水量を調整した。川の中に柱を立て、柱の間に板を入れ水量を調整していた。この堰を「坎」と呼んでいた。この流量を調整する役人「坎番」がいた。それが大正時代にコンクリートの堰に変わり、農業用水が不要になり、堰が流れの障害となり洪水の原因になるとして、昭和4年(1929)この堰が撤去された(蒲田町史に記載)。



6. 潮見橋の建設

潮見橋は、大森第4小学校が出来て大森東4丁目・5丁目の学童が呑川橋を渡って通学するには不便なので、海苔船が下を通れるよう、人とリヤカーのみが渡れる太鼓橋が地元の人たちの努力で昭和8年(1933)に出来た。

7. 新呑川の開削に向けて

大正14年(1925)東京府に提出した決議文は、府会に提案されその後決定された。蒲田町に於いては他町より呑川改修に対する要望は強く、町としても独自に東京府に対して要請行動を行っていた。しかし2年後、大井の立会川は府費で改修が行われると決定されたのに、内川、呑川は外された。そこで昭和4年(1929)再び蒲田町会では再陳情の件議案を可決し、東京府知事に

上申し、東京府土木課長にも陳情した。昭和6年(1931)には中土手事件もあり、同年12月東京府に於いて、昭和7年度より府費で呑川改修を行う決議をした。そして昭和7年(1932)11月より工事に着手した。

8. 蒲田町としての取り組み

蒲田町としては東京府に陳情する一方、町民の被害を放置するわけにいかず、大正14年11月町会に於いて「緊急治水計画」を決議し、費用を工面しとりあえず呑川下流夫婦橋以下416間(約7.5km)を3工区わけ大正15年(1926)8月より工事を開始したが、羽田町側の反対で工事を中断。昭和2年(1927)11月東京府の認可を得て、12月に着工し翌3年(1928)に竣工した。内容は両岸板張りで、川幅羽8間(14.4m)となった。

一方、昭和2年(1926)7月の町会に於いて、かねて折衝中の大森町に対し、呑川改修工事費を寄付し、大森側の手によって川幅6間半(10.8m)の開削を要請する決議をして、寄付金を交付した。大森町は同年8月に工事に着手し年末に工事は完成した。

この結果、大雨所の洪水を一部緩和したが、根本的な解決には至らず、大雨のたびに呑川は氾濫し、依然として町民の悩みの種のままだった。

9. 新呑川開削前の工事

蒲田耕地整理組合は蒲田町治水工事の計画を作り、蒲田町に資金を提供して工事を行うことを昭和7年(1932)7月に協議し決定し、同年9月より工事を開始した。

- 第1工区 日本自動車学校より御成橋まで
幅 逆川交流点下流側5間(9m)、
上流側4間(7.2m)、両岸板柵
- 第2工区 御成橋より省線鉄橋まで
幅 4間(7.2m)、両岸板柵

第3工区 省線鉄橋より女塚堰まで及び支流2ヶ所

幅 2間半(4.5m)、両岸板柵

第4工区 女塚堰より池上境まで

幅 2間半(4.5m)、乃至4間(7.2m)

両岸板柵

呑川以外にも、陣川、逆川、女塚川、六郷用水など蒲田町内の水路の改修を行った。

10. 新呑川の開削

住民の強い要望を受けた蒲田町会の長年にわたる努力によって、昭和6年12月東京府会を通過し、呑川改修が行われることになった。

その内容は、第1期工事として、夫婦橋下流から羽田藤兵衛澗に至る延長2,456mである。第2期工事は夫婦橋上流より池上養源寺に至る延長2,636mである。

第1期工事は、昭和7年(1932)11月から着工した。従来の呑川の下流は、蒲田町の東端から北東の方向に蛇行して、海に注いでいたが、今回の改修工事によって、清水橋下流から羽田の田圃を一直線に東進し、藤兵衛澗に注ぐ新河川となった。従来の呑川はそのまま残された。

新呑川の幅は27m27で、深さは14m半となり、城南地区での大きな運河が現れたと称された。大き目の船の運航も可能となり、そのため夫婦橋下流に第1荷揚場、23号放射道路(現産業道路)脇に荷揚場を建設して荷揚げ出来るようにした。

大田区史によれば、河口までの2,692mの工事を含めて、昭和10年(1935)に完成したとある。

第2期工事は、夫婦橋上流から省線鉄橋付近まで幅14m半、その上流養源寺橋までは13m3分となる。工事は昭和11年(1936)に着工予定と蒲田町史には書かれているが、実際は

戦争のため一部しか実施されなかったと思われる。実際にこの計画が実行され完成したのは、戦後の昭和 40 年代と思われる。そしてそれ以降呑川の氾濫は起きてないと思われる。

11. 呑川の不思議

呑川には分からないことがいくつかある。

その一つに、末尾図 6~7 による呑川の流れの変化である。

呑川のそばに建つ北野神社が、明治時代末期の末尾図 8 の地図には左岸に描かれているのに、大正時代の末尾図 9 の地図では右岸に描かれている。北野神社が移動したというより、明らかに呑川の流れが変化している。にもかかわらず、大田区史、蒲田町史のいずれにも書かれていない。

周辺の住民に聞いても、記憶している人は見つからない。どう考えても昭和 7 年の新呑川開削まで、呑川の流路変更の工事を行ったという記載もなく、近隣住民の記憶にもない。

大田区史の中、「町の治水計画」の項で東京府に陳情して呑川の改修(新呑川の開削)とは別に、蒲田町として独自の改修を行っている。呑川下流夫婦橋以下 416 間(749m)を 3 工区に分けて、大正 15 年(1926)工事に着手したが、羽田町側の反対にあい、東京府の注意により工事を一時中断した。その後東京府の許可を得て、昭和 5 年(1930)各工区に着手、翌昭和 3 年(1928)に両岸板張り、川幅 8 間(14.4m)で竣工した。との記述があるが、着工が昭和 2 年だったとしても完成は昭和 3 年であり、これ以降に発行された地図ならこの時に改修されたと理解できるが、それ以前では

考えられない。地図が間違っているのか、発行年次が間違っているのかわからない、

たかが 90 年ぐらい前のことすら明確にならない。

このように、呑川の記録がすくな過ぎる。これからは我々が呑川の記録を残し、未来の人々に臭く汚かった呑川、子供が水辺で遊べなかったなど、未来の呑川では考えられないことを書き、写し残すことが大切だと痛切に感じた。

以上

【参考文献】

1. 大田区史 蒲田町史 池上町史 大森区史
新編武蔵風土記稿
2. 東海道夫婦橋のほとり 著:山本 理平氏 呑川は流れる 大田区教育委員会編
3. 大田区の文化財 24 集 地図で見る大田区 (1)、25 集(2)、26 集(3)
4. 明治 14 年の地図は帝国陸軍地測部発行の通称「迅速・図」
5. 大正末期の地図と昭和 10 年代の地図は、大田区の文化財第 25 集と 26 集に収録された 1/5,000 の地図を元になっている。(原本は 1/3,000)
6. 大正期の地図の発行者は「内務省復興局・都市計画地方委員会」
7. 昭和初期の地図は「日本地形社」
土地利用図制作: 六郷用水の会 三橋 昭 氏

